

精神科医の思うこと③⑦

『知的障害』と『大学』

松村 奈奈子

ここ数年、大学が学生の募集停止を発表して、大学自体の閉校・廃校となる大学の記事を見る事が増えました。少子化で子どもの数が減れば、いろいろな事がおこるんだと思います。

実は私、知的障害更生相談所という18歳以上の知的障害の療育手帳の発行に関わる所で20数年嘱託医の仕事をしています。十数年前から、ぽつぽつと大学生が療育手帳の申請をし、療育手帳を取得するケースをみるようになりました。うーん、なんだかいろいろ考えてしまいます。なので、今回のテーマは「知的障害」と「大学」

ところで、知的障害とはどんな感じ？という事ですが、18歳以上の成人では、知的能力をみる発達検査(ざっくりいうと国語や算数の能力を調べる検査)で平均した能力が12歳以下だと、知的障害と診断され「療育手帳」を取得する事ができます。発達検査の種類で結果に少々差が出たり、市町村の基準も少し違ったりするので、「だいたい」な感じでご理解ください。

近年は「知的障害」に対して、「早期に気づいてサポートを」という流れがすすんで、乳幼児健診はもちろん、保育所や幼稚園、学校でも先生方が気づいて検査を勧めたり、サポートを受けるために療育手帳の申請を勧めたりしています。厚生労働省の発表でも、子どもの人口は減っているのに、療育手帳の発行数は増えています。2歳や3歳の就学前の申請も多くなった気がします。

20年前は「うちの子に障害はないんです」「祖父母が反対するので」「近所の目が・・・」という理由で、療育手帳やサポートを勧められても、拒む家族によく会いました。療育手帳の申請が増えた今も、拒んでいる家族にまだ時々は会いますが、知的障害に対するとらえ方は大きく変わった様に思います。

その一方で、知的障害の診断は受けていて、高校受験には支援学校も勧められたけど、地域の高校を受けたら合格して、勉強はよくわからなかったけど、真面目に毎日学校には通って卒業

した。高校の推薦で大学受験をした。試験は面接だけだった。大学に入ってもよく勉強はわからなかったけど、レポートとかは家族が手伝って提出してました…という感じのケースを時々みるようになりました。細かく聞いていくと、大学サイドも知的障害であることは理解しているようで、特別に個別指導をしたり、テストで配慮をし、ほとんどは留年する事なく卒業します。そして、一般の就労は難しいからと、大学の就職相談室の勧めで4回生の大学生が療育手帳を申請されたケースもいくつかありました。

十数年前の話です。

大学を卒業したが、就職試験が全て落ちたので、障害者として就労したいと20代の女性が、療育手帳の申請のために診察室に来られました。小さな会社を経営するという父親と優しいような母親と一緒に、休日は家族で外食したり旅行したりといったエピソードが自然とでてくる、仲よしの親子でした。

父親は「知的障害の事は小学校の頃からわかってた。でも、なんとなく友達もいて普通学級できた」「高校も、いい高校ではないけど、合格したし、僕らも応援して宿題とかは手伝いました」「毎日、真面目に登校していたので、高校から推薦で大学に行けると聞いて、僕も大学生活は楽しかったので、行かせてみました」「本人は本当に真面目なんで、大学の授業には全部出席していたんです」「レポートとかは本人には難しいのもあって、僕らが書きました」「学校側にも事情を伝えて、出席点でカバーしてもらったり」と話します。

一方で、本人に「大学、楽しかった？」と聞くと「あんまり…」とうつむいてしまいます。「授業、わかった？」と聞くと「ぜんぜん、わからなかった」と言い、「ちょっとしんどかった？」と聞くと「うん」と父親の顔を見ながら苦笑いします。父親はちょっぴり驚いた表情です。診察の日にした知的能力の検査結果から考えると、大学の授業の理解は難しかったのではないかと思います。

こういう時、私は家族に「彼女が大学で毎日聞いていた授業は、我々が東大の難しい授業を聞いている感じだと思います」「毎日、机に座って理解できない授業をじっと聞いているのはどんな感じでしょう？同級生が『こんな簡単やねー』って話しているのを、独りだけ『自分はわからない』って思う状況はどんな感じだったと思いますか？」と家族と一緒に、彼女の大学時代のキャンパスでの姿を振り返って想像してみる事にしています。

父親は「そうか、あんまり楽しくなかったかー」「てっきり、いい感じでたのしんでくれてるのかなって思ってた」「そうですよね。僕らの自己満足だったのかもしれない」「定員割れした大学だったので、1人の授業料も必要だったのかもしれないですね」「我々はいいいカモにされたんですかね」と苦笑されます。

私は「本人がお父さんの事が大好きなのは伝わります。お父さんの期待にこたえたかったんじゃないかな？」と話しました。本人はニコニコして頷いていました。

そして父親は続けて「実は、小売り会社の経営をしているんですが、時々、知的に障害があるんじゃないかなって子がバイトでくるんです。やっぱりミスが多くて、怒ってしまいます。僕らもどうしようかなってなるんですわ」「娘には、障害を理解してもらった環境で、働いて欲しいです」

と話されました。その後、彼女は手帳取得し、障害者の就労移行施設に楽しく通所していると聞きました。

大学生活を送った知的障害の学生が手帳を申請する時、私は本人に必ず「大学、楽しかった？」と聞くことにしています。なぜなら、本当に大学を楽しめてるのかなあと気になっているからです。そして、多くの子どもがせっかく大学に入学したのに「楽しくなかった」と答え、なんとも言えない気持ちになります。

もちろん、療育手帳を持ってはいるけど全く利用せずに、大学に進学、特に配慮なく大学を卒業し、一般就労についたケースも聞いたことはあります。

ただ、障害の指摘は受けてきたけど、中学や高校を卒業後、療育手帳を取得せずに一般の仕事を始めたが、能力的な問題で、なかなか継続できずに職を転々として、30歳を過ぎた頃に「やっぱり、限界や」と療育手帳の申請に至るケースはとても多いです。

また、障害を伝えていない職場では、やはり厳しい指導を繰り返されたり、退職を促されたりで、とてもストレスがかかります。人はストレスがかかり続けると「うつ病」などの精神症状がでます。そこで精神科を受診し、経過を聞いた精神科医に勧められて初めて療育手帳の申請にこられる30代40代の知的障害の方も多いです。

療育手帳を取得しなかったり、サポートを受けずに来た事でおこる様々な辛い経過を聞いてしまうと、いろいろ心配してしまいます。私が心配しすぎなのかもしれないですが。

で、今回のテーマ「知的障害」と「大学」

知的障害の方が大学に進学し、大学は障害を知らず手厚いサポートで大学を卒業させ、療育手帳の申請を勧める・・・大学教育として、これは本当に「知的障害者」の人生や未来の事を思っているのか、いないのか？支援となっているのか、いないのか？難しい問題です。

ただ、ほとんどの学生が「楽しくなかった」「しんどかった」と答える現状があります。

私は、子ども達が無理なく笑顔のある生活ができる環境が大切だと思っています。そして「勉強」とはわかって初めて、楽しく感じるのではないかなあとも思います。

余談ですが、支援学校の高等部を卒業して、多くはすぐ障害者雇用で就職となります。支援学校卒業の子どもにも、「大学」というモラトリアムな時間を体験させてあげたい、という動きがあり、全国にちらほら「大学」ではないけど、知的障害を対象に、いろんな事をもう少し学ぶ大学に似た施設もできています。また、いくつかの大学が知的障害者を対象としたオープンカレッジを始め、「生涯学習」として学びや大学生活を体験できる場も増えています。これは欧米が既に始めている知的障害者の大学での学びのスタイルです。このスタイルでは、レポートを読む限りですが、知的障害者の学生が楽しく大学生活を送っているようです。

こういう感じのシステムが、すすむといいなあとは思います。